

特集

男性不妊診療の ニューフロンティア 保険適用で変わる近未来像

企画にあたって

不妊治療は今まで自由診療の側面が強く、一部の限られた施設で行われており、一般診療とはほど遠いものであった。その不妊治療が2022年4月から一部を除いて保険適用となった。国民皆保険であるわが国において、保険適用の疾患は多くの施設で受けることができる医療を目指す必要がある。この不妊治療の保険適用は、男性不妊診療を再考する絶好の機会と考えられる。

そこで、実際の診療現場において起こっている問題はどのようなことなのか。保険適用になっていない診療行為、混合診療が認められないため自費診療にならざるを得ない治療、また今までの国や地方自治体の補助制度がなくなってしまい、経済的により条件が悪くなってしまったカップル、といった問題点が出てきている。このため、男性不妊、女性不妊とそれぞれの立場で保険適用になった故の問題点を明らかにする必要がでてきた。この点を保険適用におけるメリット、デメリットとして、まずは解説いただいた。

また、日常の男性不妊治療として行っている医療内容は漢方薬、サプリメント、ホルモン治療といった薬物治療、そして精索静脈瘤手術、精巣内精子採取術、精路再建術といった外科的治療が行われている。この治療について、今回不妊治療の第一線の現場で診療を行っている先生方に執筆をお願いした。さらに、不妊症の問題を環境問題や不妊症の精巣の病理の違い、また今AYA世代の癌治療における精子保存について国家規模で取り組む問題になっており、この点も解説いただいた。

この1冊が男性不妊治療のニューフロンティアとなり、かつ男性不妊症のバイブルとして常に診療現場で活用され、多くの泌尿器科医にとって不妊治療が身近な診療になることを期待したい。

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター
泌尿器科

梅本 幸裕